

後半部には唱導的な内容の相当に長い言葉が目につく。保元物語のように死に関わっている場合もいくつか出て来るが、平家物語では、善知識の引導を渡す言葉が相当に長い言葉になっている点が保元物語と異なる。

承久記では、承久の変の結節点をなす部分に相当に長い言葉が配されているように見える。このように構想と相当に長い言葉が結び付いているのは、平家物語の前半部や平治物語にいくらか窺われたのであるが、承久記では、全体の結節点が押さえられている観のある点で、他の軍記と大きく異なっている。発言者としては、政子、義時で四三分三を占めるように、幕府方の、朝廷の權威を物ともしない言動が印象的で、この点、平家物語前半部の重盛の言動と対照的である。

以上、十分に纏められないが、相当に長い言葉には各軍記間で違いのあることがお分かり頂けたのではないかと思う。

(注一) 平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本・小城本等には、最近、屋代本と覚一本の混態本文であることが指摘されているが、屋代本の欠巻部分は、取り敢えず高橋貞一氏の八坂甲類本に依ることとした。

(注二) 永積安明「保元物語 中」(鑑賞日本古典文学「保元物語・平治物語」昭和五一年九月)の「為義最後の事」の鑑賞から。

(注三) 「半井本『保元物語』の構成とモチーフ——成立事情を観点として——」(『軍記と語り物』昭和四三年十二月)。

(注四) 慈円「愚管抄」から。

(注五) (注六) 「半井本『保元物語』に関する試論——為義像を中心として——」(『中世文学の研究』昭和四七年七月)。

(注七) 「一類本『平治物語』成立についての試論」(『軍記と語り物』昭和四一年十二月)。

(注八) 「平治物語」「総説」(注二の鑑賞日本古典文学)

(注九) 「鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇」平成五年十二月。

(注一〇) 林屋辰三郎「平清盛と重盛」(『平家物語講座』昭和三二年)

(注一一) 「維盛出家」(『平家物語評講 下』昭和三八年八月)の「評説」から。

(注一二) (注一三) 「第十六句 大教訓」(『平家物語 上』昭和五四年四月)の補説から。

(注一四) 「第十四句 小教訓」(同前)の補説から。

(注一五) 「第百十九句 大原御幸」(『平家物語 下』昭和五六年十二月)の補説から。

(平成六年四月二十七日受理)

多くの武士が義時の許に集まった。義時は軍議を開いて、各手の配兵を決めた。そして、主な戦場などについての注意を与え、援軍が必要な時は自ら立つ意志を示した。それから、敗れた場合には徹底的に朝廷に抵抗し続けることを具体的に述べて、開戦の日を告げ、結んでいる。

右の義時の相当に長い言葉は、その大半が将士の手分けとなっている。このような将士の名寄せは、平家物語の頼政が以仁王に蹶起を促した言葉に、やや近いものを見出せようか。しかし、末尾に付いている徹底抗戦の決意は、これまでの作品には出ていない（相当に長い言葉としては）。

最後のものは、武蔵守泰時から京方の処置を求められて答えたものである。新しい上皇と天皇、御鳥羽上皇を始めとする京方の処置、京の公卿で重んずべき家々、こうした事柄が簡潔な表現で畳みかけられている。この簡潔さは、この前のものにも通じるようだ。

## 五

以上、現在最も古態を残すと考えられている伝本について、中世四軍記の相当に長い言葉を具体的に検討して来た。本稿の冒頭で、各軍記間で違いがあり、それが各軍記の印象と大きく関わっていると述べたが、改めて、その各軍記の相当に長い言葉の特徴を纏めて、この稿を終えたい。

保元物語では、人の死に関わり、悔しさに満ちた繰り言といった内容のものが印象深い。これは、それまで平穩を装って来た貴族社会が遂に崩壊して、戦乱の世が始まり、死刑が復活したことと関わっているであろう。

発言者は源氏の為義が二例、その子の乙若が二例と、悲運の父子に傾っている。従って、哀れな逸話が多いような印象を受ける。

平治物語の相当に長い言葉は、義朝・義平父子の敗戦後の行動を語るものとして、先ず使われている。これは、義朝父子に深い関心があつて、平治物語が作られたことを物語っている様だ。このことは、頼朝による源氏の再興が、或る者や盛康の言葉に匂わされていることから間違いない。発言者としては、光頼や信西のような気骨のある貴族の言葉が三つもあることが印象深い。しかも、これらの言葉は、乱の発端となり、乱の帰趨を決定するものとなっていた。平治物語は、乱の節目をこれらの貴族の言動に見、そこに相当に長い言葉を配していることになる。このような相当に長い言葉の使い方は承久記に通じているように思う。

平家物語は、他の軍記よりも長いだけに、相当に長い言葉の内容も多様である。しかし、その中で特に目につくのは、年齢や身分などで下位にある者が上位の者の意見などを拒否して、自分の考えを堂々と述べている言葉の多いことである。これは、清盛・重盛父子を対立させて、歴史を描いて行くという構想が齎したものかと考えられるが、特に重盛が話術を尽くし、論理を押し詰めて語ることになったからであろうか、雄弁家が多い。平家物語の時代は、自分の考えを表明し、相手を説得する、そうした話術の尊ばれた時代かと思われる。発言者としては、重盛、清盛、俊寛、頼政に相当に長い言葉が多く、これらの人物が全て前半部の登場人物なのが興味深い。「治承物語」の面影がこのような面に残っているのであるか。

#### 四

承久記には四つの相当に長い言葉がある。その四つの相当に長い言葉が、保元物語・平治物語・平家物語と異なる点は、乱の経過を語って行く上の結節点に限られていることである。

京方で、相当に長い言葉をもつのは平判官胤義である。

後鳥羽院から討幕の計略を立てるよう命ぜられた能登守秀康は、胤義を招いて、心底を問う。胤義は即座に討幕を承知した。胤義がこのように即座に応じたのは、妻が左衛門督頼家との間に男子を儲けていたが、頼家は遠江守時政に、男子は権大夫義時にと北条氏に殺された、その恨みを晴らしたいという思いを抱いて、上京していたからであった。胤義は、兄駿河守義村と心を合わせて義時を討つ策を述べ、即座に討幕の軍議を開くように要求したのであった。胤義の返事によって、朝廷の討幕計画は一気に進展した。

後鳥羽院の討幕の意志が実行の運びとなったのは、右の胤義の呼応による。ここでは、鎌倉武士の胤義が何故北条氏に恨みを抱いたかを前半で述べさせ、後半に義時を討つ彼の作戦を述べさせている。京方は、この胤義の作戦を採用して旗揚げすることになった。従って、胤義の言葉は、京方の軍事的な出発点でもある。

京方の重要な言葉が胤義の言葉であるとすれば、これに対応する鎌倉方の重要な言葉は、二位殿政子の相当に長い言葉である。

朝廷の討幕の動きを知らされた政子は、すぐ有力な御家人を集めた。そ

して、今度義時が討たれたら、大姫・頼朝・頼家・実朝に重ねて、五つ目の悲しい出来事となると訴えた。そして、実朝が京の大番役を廃止した功を挙げ、頼朝・実朝の墓を馬の蹄で潰すようでは、武士の冥加はないと言った。このように政子は自分への同情を求めながら、いずれに就くつもりか、諸將に態度を明らかにするように迫った。武田六郎信光が政子の味方をすると、これに応じ、諸將の態度は決まった。

政子は、義時を夫頼朝、我が子大姫以下と同等のものと位置付けている。即ち、血縁的には政子の家族の一人、政治的には頼朝を始めとする源氏將軍の後継者として扱った。政子は、このように義時を位置付けて、自分の涙と源氏將軍の功績の二面から幕府を守るよう訴えたのであった。源氏將軍家の生き残り政子が討幕の動きを受けて立つよう訴えたことによって、鎌倉武士の態度は決まった。信光が「二位殿ノ御方人」という表現を用いているが、鎌倉方は政子が中心になって結束した。政子の相当に長い言葉は、このように鎌倉方の対応の要なのである。

承久記は右のように、京方の動きの核心となった胤義とこれを受けて結束して対戦することの核となった政子の二人に相当に長い言葉を述べさせて、京・鎌倉を浮き上がらせ、又、合戦の成否を明らかにさせている。相当に長い言葉をこのように物語の核として使った軍記物は他にない（作品そのものの量の問題もあるが）。

残りの二例は、いずれも義時の言葉である。

政子に鎌倉武士が忠誠を誓い、義村も義時に京方の動きを通報した後、

ろう。短い解説を挿んで、俊寛の言葉が相当に長く続くのは、そのような意味もあつてと考えられる。

俊寛が待ち得たものの次に、自分の一生を六道に擬えた建礼門院の言葉を見てみよう。

女院が生きながら六道を見たと言うので、法皇は女性の身で六道を体験することがあるだろうかといぶかしがられた。それに答えて、女院は自分の体験を、(天上) 後の位に就いて、天皇の母となった時期、(修羅) 一谷の敗戦以後の一門の状況、(餓鬼) 飲食にも事欠く同時期の状況、(地獄) 門司赤間での滅亡、(畜生) 明石の浦で見た竜宮の夢、のように語る。

右の女院の六道語りについては、水原一氏に「八坂系では六道に『人間』を欠くのが不審である。(一方系では都落ち前後の愛別離苦・怨憎会苦の経験を『人間』に当てる)。「人間」の立場の中での問答だから特記を要しなかったであろうか。」「龍宮の夢が畜生道の体験だというのはいかにもこじつけがましい。」といった感想がある。<sup>(注一五)</sup>しかし、記されている五道は、それぞれいかにもそれという形で明確に纏められている。人間を取り巻く世界を女院を材料にして語るという意図が、水原氏の指摘される疑問の箇所を陰をなしているのは間違いあるまい。

女院の言葉は唱導色の濃いものだったが、聞き手は訪ねて来た法皇であつた。しかし、残り二つの例は、死に接している人に向かって唱えられるものである。

入水を直前にした惟盛は、念仏を止めて妻子のことが思い出されると、

懺悔したのであつた。滝口入道は、惟盛の言葉の通り、妻子こそ生死を離れがたい絆であると説き、伊予入道頼義の例を引いて出家の功德は何物にも勝ると言つて、入水して成仏得道した後に妻子を迎えるようにと勧めた。入道の言葉によれば、入水こそ真の出家であり、成仏得道への道とされている。その点で、間違いなく入道の言葉は補陀落信仰を伝えたものである。「日本國ノ將軍」に納まるべき惟盛が、「運尽キ」たので入水して、妻子を救うという入道の解説図は、興味深い。しかし、筆者には、入道の言葉通り、惟盛が妻子を救えたとは書かれていないように見えるが。

次は、大臣殿宗盛の処刑の場面である。

篠原で切られる直前、宗盛は善知識として呼んだ本淨坊堪豪に右衛門督清宗の居場所を問う。これに対し、堪豪は、互に悲しみが増すばかりだからと言つて、考えないように諭す。そして、死こそ生ある者の定めであり、この世は空であると説き、弥陀如来の悲願に向かつて念仏を唱えるように勧めたのであつた。

前の惟盛もこの宗盛も死に臨んでいる。保元物語では、このような時、本人の悔みが相当に長い言葉となつて記されていた。ところが、平家物語では、死んで行く本人達は家族への恩愛の情をひたすらに訴え続ける。そして、本人に代わつて、各善知識が彼等の思いを此岸から離れさすべく、相当に長い唱導の言葉を連ねているのである。この点は、平家物語と保元物語の対照的な点と言えるのではないかと思う。

の後の三つの不満を付け加えている。その第一は清盛が平家の為にも悲しんでいる保元以後の朝廷の為に身を挺して来た重盛の死に対して、法皇に哀悼の態度が見られないこと、第二は重盛の永代領ということになっていた越前国を召し返したこと、第三は清盛の推薦した二位中将基通を中納言に任命しなかったことである。特にこの時は、重盛に先立たれて、もうどうなっても良いといったような言い振りを見せている。

清盛は、先述のように一貫して昔の功を数え、今の法皇の態度に不満を募らせる人物として描かれるのである。

次に、法勝寺執行俊寛僧都に關係する相当に長い言葉が三つある。これは、今昔物語集「駿河ノ前司橘ノ季通、構テ逃ケタル語」の小舎人童の言葉のように事情を説明したのが主になっている。

有王に余りにも変わり果てた姿で、今まで生き長らえているのが信じられないと言われて、俊寛は、少将成経の言葉を頼みにして生き続け、元気な時は硫黄を掘って売り、体が弱ってからは海産物を乞うたり拾ったりして命を繋いで来たことを語る。

成経達が召し返された後、俊寛がいかにして生きて来たかは、地の文で描かれることはなかった。そこに焦点が絞られていた訳ではないが、中央から切り捨てられた流人の末路として、同情と興味をもって、読まれたに違いない。

又、自分には家族からの消息が全くないことに不審を抱いていた俊寛に対して、有王は答える。俊寛が西八条に行った後、追捕の官人が来て、家

中の者を逮捕し、全員を処刑したこと。若君は、鞍馬の奥に逃れて、鬼海島に行きたいと有王に訴えていたが、去る二月に瘡瘡に罹って、亡くなったこと。北の方も、嘆きが積もって、三月に後を追うように死去したこと。従って、今は姫君一人が生き残っているが、その姫君の手紙を携えていること。

これも、寧ろ関係者の口から、罪人となった場合の一家没落の姿をまざまざと語ることに主意があるのではないかと思われる。俊寛の前に、想像もしなかった、一家の滅亡の様が語り示される。読者は、俊寛に身を寄せ、それを聞くことになろう。

有王から渡された手紙を読んで、俊寛は、その文が余りに幼いと言って、泣き悶える。その後、作者の短い解説を挿んで、俊寛の相当に長い言葉が続く。彼が生き長らえて来たのは、妻子に再び会う為であった。死んだ男の子と特に惜しむことなく別れて来たのが今悔まれる。一方、生き残っている女の子に会ってもつらさが増すばかりと思われる。俊寛の覚悟は決まった。

成経の言葉を頼みにして生き長らえて来た俊寛が耳にしたのは、生への望みも絶える出来事であった。有王の話を聞いてみれば、故郷に帰るのは、只「己ニ憂目ヲミセ」るだけと考えられる。俊寛があれ程鬼海島を出たいと願ったのも、今にして思えば何であったか。俊寛の物語りは、「加様二人ノ思ノツモリヌル平家ノ末ソ怖シキ」という文で終わるのだが、この「人ノ思」は具体的には俊寛の言葉などに込められていると見るべきであ

近い。但し、重盛は自分の首を刎ねよと涙ながらに訴えたのであるが、頼政は、門を変えて欲しいとあつさり申し出ていて、変化が付けられている。

頼政の言葉を伝えられて、行列に動揺が生じる。それでも、「若大衆共」には、構わずこの門から入れよという声が多かった。そこに、「三塔ノ云口一山ノ張本」撰津堅者豪雲が、頼政の申し入れを尤もとして、門を変えるよう演説したのであった。豪雲が主張したことの一つは、「神輿ヲ陣頭ニ振奉テ訴詔ヲイタス程ナラハ大勢ノ中ヲ推破テコソ後代ノ聞モアラムスレ」ということである。もう一つは、頼政が二条天皇の時代に鶴を射て、大炊御門右大臣公能と連歌をしたこと、近衛天皇の時代に当座の御会で人々の詠み兼ねていた「深山ノ花」という題の歌を作ったことを挙げて、このような「ヤサ男ニ臨時ニテ情ナウ恥辱ヲハアタウヘキ」ということであつた。

この豪雲（頼政方と見られるが）の相当に長い言葉も、大衆、特に「若大衆共」に対して反対の意見を表明したのと言えるだろう。大勢の者に對して、反対の意見を述べたという点では、保元物語で乙若が弟達を窘め、すかした言葉に通じるところがある。しかし、豪雲の言葉は、頼政の申し入れを受けている点で、乙若などと大きく異なる。又、この場合、豪雲は、仲間、特に「若大衆共」に向かつて意見を述べたのであつて、どう見ても相手に目上という属性を見出せない点で、その他の全ての反対の意見と異なっている。猶、本稿ではこの一例だけだが、平家物語には大衆の中に有力な弁説家がいたことが、何回か記されている。

頼政にはもう一つ、高倉宮以仁王に蹶起を促した相当に長い言葉がある。この言葉は、冒頭が以仁王に天皇の位に就くべく蹶起を促した言葉となつてい、末尾に、平治の乱以後不遇であるから、頼政を始めとして諸国の源氏が、令旨に喜んで馳せ参じるだろうという言葉がついている外は、諸国に散在している源氏の列举となつている。

頼政は、以仁王に不遇な現状を突き付けて、悔しさを掻き立てている。源氏も平氏に差を付けられて不遇だと言うのだから、不遇な者同士が力を合わせて、天下の奪取を企画したようなものである。源氏の名寄せが大半を占めるが、このような例は保元物語・平治物語にはない。

頼政関係の三つの相当に長い言葉を見て通つたので、次に清盛の二つの相当に長い言葉を見てみよう。清盛の言葉は、自分を始めとする平氏の法皇への献身を数え上げ、そのような献身を無視して平氏を除こうとする法皇の忘恩を憤る、法皇への不満が充ち満ちたものとなっている。

先ず、筑後守貞能を呼んで兵を集める命令を下した時の言葉を見てみる。ここで清盛が自分の献身として数え上げていることは、保元の乱の時一門とは別行動を取り、父忠盛の養君重仁親王も見捨てて法皇方に付いたこと、平治の乱で義朝軍を敗つたこと、経宗・惟方を捕縛したこと、この三つである。このように清盛が身命を顧みず奉公して来たのに、法皇は成親や西光の言葉に付いて、鹿谷の謀計を企てたというのが、清盛の言い分であつた。次に、静憲法印を召し返して、自分の不満をぶちまけた時の言葉を見てみる。この時も清盛は鹿谷事件への加担を挙げるが、ここではその前にそ

重盛の最後の相当に長い言葉は、先の清盛の法皇を幽閉しようという意見を涙ながらに諫めた後、小松殿に帰宅した重盛が、主馬判官盛國に命じて、武士を非常召集する、それに応じて馳せ集まった二万余の武士に対して述べられたものである。

この時の重盛の話の内容は、予ての約束通りに馳せ集まった武士達を勞うことと、これに懲りず召した時は今回のように集まれということで、大半は幽王・褒姒の故事に費されている。

ここに描き出される重盛は、故事等の知識が豊かで、話術に長けた者ということになるか。この点は、成親を処刑することを諫める条で指摘したことにも通じるようである。それにしても、重盛が武士を集めたのは「父ヲ諫メ申サレツル詞ニ随テ我身ニ勢ノ付ヤ不付ノ程ヲモ知り」「角テ入道ノ心ヲモ和ケ奉ラントノ計コト」であつたというが、平家物語の重盛の言動としては驚く程に激しい。重盛は珍らしく示威運動をしたのだが、場面はそれを必要とする程緊迫していたということなのであろう。武士を召集することによって清盛を「狂覺タル景氣」に導き、武士には懲りないように諭す重盛は、周到な智者と評すべきだろう。

話が逸れてしまったが、再び異なる意見を述べた相当に長い言葉に戻りたい。

二条天皇が故近衛天皇の後多子の入内を求めたので、公卿僉議が行われた。公卿達は、中国では則天皇后が唐の太宗・高宗の二代后に立たれたという例があるが、本朝では神武天皇から七十余代の間、二代后の例を聞か

ないと言つて、反対した。

数人の言葉を纏めて一つの相当に長い言葉としたものは、保元物語の鳥羽上皇の旧臣達の言葉がそうであつた。又、この言葉は幽王・褒姒の故事が大部分を占めた、この前の重盛の言葉と同じく、則天皇后の話が大部分を占めている。このように中国の例話が大部分を占める相当に長い言葉も、平治物語に越王勾銭の例を挙げた或る者の言葉があつた。猶、則天皇后の例は反対の根拠になつていないので、二代后の例の珍らしさから紹介されただけのような気がする。

次に、源頼政関係の三つの相当に長い言葉を見てみよう。

加賀守師高等の処罰を要請して、日吉三社の神輿を捧げて、比叡山の大衆が右京大夫源頼政の守護する縫殿陣から、大内裏へ入ろうとした時のことである。頼政が渡辺長七唱を使者に立てて、大衆に門を変えるよう申し込んだ。頼政は、その中で、最初に山門の憤りに同情していることを表明している。従つて、自分の守護している門から入つてよいが、それでは、最も易い門を選んだと後日非難されるだろうと、気になることを指摘する。その上で、頼政自身も、妨害すれば医王山王の罰を、入れれば宣旨に背いた罰を受けることになつて、進退に窮していることを告げる。そして、重盛の守る東の門から入るよう勧める。

この頼政の申し入れは、起承転結という構成をなしている。ここ、転部で、進退に窮する位置に立たされていることを表明している条は、後の（但し、本稿では既述）重盛が清盛に向かって法皇の幽閉を制した場面に

うべき言葉を見出し得なかったのに違いない。

西光の清盛に対する相当に長い返事は、論理が権力を切り返そうとしている風であるが、清盛に対しては、重盛もまた論理的に対決している。

成親の平家打倒の企ては法皇の考えに発するものと告げた清盛は、法皇を鳥羽の北殿か、西八条に移すのはどうか、と重盛に相談する。重盛は、この相談を聞くや否や、泣き出してしまふ。驚いて呆然とした清盛に、重盛は、出家した者の言葉とは思えないと批判的な言葉を述べ始める。そして、現在、平家が「希代之朝恩」を受けていることを指摘する。しかも、これまでそのことに誇って、人の反感を買う振舞いが無くはなかったけれども、未だ運命が尽きていなかったので、今回の謀議も事なきを得た、従って、今こそ「奉公之忠勲」「撫育ノ哀憐」を尽くすべき時だ、と重盛は言うのである。道理に就くということになれば、院方に付くということになるが、それでは父に背き、不孝の罪を負うことになる、老子の言、漢蕭何の例を考えれば、運の尽きる条件は揃っている、と重盛は考える。自分には、首を刎ねて貰う外、道がない、と重盛は泣きながら訴えるのであった。

この場面等については、水原一氏に「平家物語の中に、英雄清盛に立ち向う賢臣の道を力説することによって、大きな文学的構造を作り上げている」という評価がある。<sup>(注二)</sup> 清盛の「御運」に関する思考は、重盛独特の哲学であるが、その哲学や儒教思想を一方の極限まで突き詰めたところで、重盛の諫言が出来あがっていることに注目すべきであろう。「いかにも理屈つ

ばい道学者的風貌」<sup>(注三)</sup>と評されているが、「理屈っぽい」というのは、平家物語作者の弱者方に与えた武器のように見えるし、理屈の極限を生きる点に重盛の絶対性が置かれているのではないか。

重盛の諫言と言えbaum一つ、右より前の成親の死罪を宥める言葉も相当に長い。

重盛は冒頭、成親が出世者であり、その分法皇の寵愛が厚いことを指摘する。そして、ひよつとして無実ということも有り得ないことではない、と言つて、讒言であつたと聞く昔の例を挙げている。更に、死刑を執行することの恐ろしさを、信西の例を挙げて主張し、成親を夜の中に処刑することを制して、言葉を終えた。

右の中、重盛が無実の可能性もないことは無いと主張している所は、彼の言葉にも拘らず、「親シ」さの為に詭弁を弄している感じを与えかねない（平家物語は成親の平家打倒の「宿意」の由来を記して来たのだから）。しかし、重盛の主旨は死刑を止めることにあるのかも識れない。その点で、水原一氏が「重盛が死刑をめぐつて清盛を制止するのは、いわば王朝の倫理が中世の暴走を食い止めようとする姿だともいえるであろう」という指摘<sup>(注四)</sup>は味わい深い。この場面での重盛は、「指タル朝敵」でもない者を簡単に死刑に処すると、その報いが子孫に及ぶと言つて、清盛を諫めたのである。彼一流の結果論的思考が中心になっていて、今日の目で見ると、こは必ずしも論理的とは言えないが、金言・箴言がその論理の綻びを危く縫い止めようとしている風である。



この相当に長い重盛の返事は、「小松内府熊野参詣事」との関わりから見ると、前者、「定業」は治すことが出来ないというのが本来のものである。そして、この重盛の姿は、『愚管抄』の伝える「イミジク心ウルハシクテ 父入道力謀叛心アルトミテ トク死ナハヤナト云」という重盛像に通じているように思われる。これに対して、後者は、拙稿『平家物語』の中の日本と外国<sup>(注九)</sup>で指摘したように、特に当道系諸本において強調されている面である。この面は、先述の「小松内府熊野参詣事」との関係で言えば単に詭弁を弄しているに過ぎないようにも見えるが、この部分だけで鑑賞すれば（語りの享受はこれが主だろう）、「宋朝に随順しようという趨勢のなかにあつて、重盛がその國家的自覺を敢然と主張した」もの<sup>(注一〇)</sup>とも言えるだろう。当道系諸本がそのような「國家的自覺」を保った人物として、重盛を理想化して語ろうとしたことは間違いない。

受戒、出家の決意をした維盛は、伴の与三兵衛重景・石童丸を近付けて、都に帰り、新しい主人を求めるように勧める。二人は、涙に暮れて暫く言葉もなかったが、重景は次のように言つて、維盛の勧めを断つた。彼は、平治の合戦の折、父景康が二条堀河で重盛に代わつて、義平の為に討たれたので、重盛に愛しがられて成長したという。童名の松王も重盛に付けて貰つたのであつたが、元服の式も維盛と一緒に言つて貰つて、重景という名を得たのであつた。元服後は常に維盛の側にいたが、重盛の最後の言葉も、維盛によく仕えて欲しいということであつたという。従つて、重景は、維盛の出家こそ自分にとっての善知識であると言つて、進んで受戒、出家

をするのである。

この一条については佐々木八郎に「与三兵衛重景が故内大臣重盛の恩情を偲んで、重盛の在世中の事を述懐するところに、しみじみとした主従の情誼と家臣の忠実心が語られている」という指摘がある。<sup>(注一一)</sup> 維盛の言葉を拒んで、彼と行動を共にしたいと言ひ出す重景の言葉は、重盛の深い影響力を物語ることになっている。

右の二例は、相手の要請を拒んではいるが、そこに険しい対立が生じている訳ではない。しかし、次の例では、返事が対決に及んでいる。

西光を捕らえた清盛は、法皇の寵愛をよいことにして過分の振る舞いをして、天台座主を流罪にしたり、平家政権の転復を画策したことを罵り、潔く白状するよう迫つた。これに対して西光は、青ざめることも悪びれた様子もなく、居直つて弁じ立てた。彼は平家打倒の計画に参加したことは、最初にあつさり認めている。法皇に仕えているので、執事の別当成親が院宣と称して起こした計画に与力するのは当然である、という認め方である。そして、その後すぐに、清盛が使つた過分という言葉の問題にする。

清盛の出世に比べれば、侍品の者が受領・検非違使になつた例は沢山ある、清盛の方こそ十四、五までは出仕もせず、高平太と呼ばれていた、しかも十八、九で四位の兵衛佐になつた時でさえ、過分と言われていた、殿上の交わりを嫌われた忠盛の子が太政大臣に成り上つたことこそ過分と言うべきであろうと、遠慮することなく言い放つのである。先に居直りの弁と言つたが、西光の弁は実に理屈っぽい。清盛は、その理屈に対して更に言

情とに充ち満ちている。しかし、平治物語は、先述のように、その一方で「命たにもたすかりなは」という頼朝の恐ろしい下心を指摘していた。池禪尼の言動を平治物語の編著者がどう見ているのか、批判的な色相があるとも見えない。清盛の流罪が決まらない為に家盛が咒咀され、その家盛に似ていた為に許された頼朝が、将来清盛の一統を滅ぼすというのは、何かの定めでもあるのであろうか。

猶、相手の短い返事を挿んで相当に長い言葉に続くという形が、平治物語では比較的多く目に付く。

最後に、頼朝の瑞兆を告げる相当に長い言葉がある。

新たに頼朝の家来となった者は、皆頼朝に出家を勧めた。ところが、その中で頼朝源五盛康だけは、常に出家しないように言い続けていた。その盛康と頼朝は配流先に下向することになった。勢田を渡って、建部社に一宿した時、盛康が来て、出家を制した理由を告げた。盛康は、八幡大菩薩の霊夢を見た、と言うのである。夢の中で盛康は頼朝の伴をして石清水八幡宮へ詣で、そこで頼朝が、義朝の弓矢を頂けられる身となっていること、又、天童から六十六の鬘斗鮑を貰って食べたことを見たそうだ。盛康の解釈では、この夢は頼朝が源氏の棟梁となり、天下を取ることを示すものだと言うのである。

この盛康の相当に長い言葉は、頼朝による源氏の再興、鎌倉幕府の創設を匂わしたものである。平治物語は、平治の乱に取材した軍記物であるが、その本質は、敗戦による源氏の棟梁の交替、源氏の次代が生き延びて行く

姿に着目した作品だと言えるのではなからうか。猶、盛康の夢は、平家物語の源中納言雅頼の「青侍」が見る夢などと深い関わりがあろう。

### 三

平家物語には十九例の相当に長い言葉がある。

そのうち、重盛が四例、清盛・頼政・俊寛が二例ずつで、この三人で全体の二分の一を占める。しかし、この点は、保元物語でも平治物語でもこうであったように、中世四軍記に共通する性格である。

ところで、十九例のうち十五例までが前半、清盛の死去までにある。このことは、平家物語の前半と後半に何らかの違いがあることを示していないであらうか。

さて、平家物語の相当に長い言葉には、平治物語以上に異なる意見を述べたものが多い。しかも、それは目下の者から目上の者へという関係の中で多く述べられているようである（平治物語で、信西が後白河上皇を諫めたのにも、同じ関係は認められるが）。

重病の重盛が医師の治療も受けていないことを知った清盛は、見舞に越中前司盛俊を遣した。そして、宋国の名医が来日して今津にいるという話なので、彼を呼んで治療を受けるように、と勧めた。これに対して、重盛は、病が「定業」ならばどのような名医も治すことは出来ないだろうと述べ、「國ノ恥」「道ノ陵遲」となることはしたくないと言って、宋の医師の治療を断った。

意向がどうあれ、自分の是とする考えを述べるべきだと意見した。そして、当家は曩祖高藤以来常に「有道の臣」と行動を共にして来たが、お前の為にその評判が傷つけられるのは残念だと、譴責した。それから光頼は、清盛が大勢で都に引き返して来ることを述べ、合戦では信頼方が勝てないと断言した。そして、いざという時、天皇に災が及ばないよう計らうことを指示する。

ここに描かれた光頼については、永積安明氏に、

信頼と信頼に追従する貴族たちを圧倒するだけでなく、何ものもおそれることなく、その意志貫徹する光頼の豪胆な人間性をみごとに表現しており、その場に居合わせた武士たちからも讃嘆される英雄的人物として語られているのである。

という指摘があった。<sup>(注八)</sup>これはその通りだが、光頼に譴責された惟方の離反が、信頼の作戦を瓦解させることになるのである。惟方を離反させるその場面向け、光頼の相当に長い言葉を二つも重ねた平治物語は、全体的位置付けが極めてしっかりしていたと評することが出来る。

最後に、平治物語の相当に長い言葉の特徴として、頼朝に関するものが三つもあることである。先ず、世間の評価とは対照的に、頼朝の深慮を指摘したものを挙げる。

頼朝の助命の話が漏れ出すと、世間の人は頼朝を非難した。頼朝は、昔の眉輪王や千代童子とは比較にならず、父が討たれても討ち死にも自害もせず、ひたすらに池禅尼に命乞いをしている、といった非難である。これ

に対して或る者が、越王勾銭の例を挙げて、頼朝は勾銭のように今は命さえ拾えば良いと考えているに違いないから、その心中を考えると恐ろしいと反論した。勾銭は、どんな郎等も及ばない程に呉王夫差に仕え、自分の国に帰ることを許された。勾銭の解放について、忠臣伍子胥は、勾銭を切らなければ呉が滅ぶと主張して処刑されたのであったが、殺される前に、自分の眼を抜いて門に掛けよ、勾銭が入城して来るのをこの目で見ようと云ったそうである。一方、国に帰ることを許された勾銭は、蟾蜍にも礼をする程、その心は弾み、勇んでいたという。

この或る者の相当に長い言葉は、頼朝の心中を解説したものとなっている。頼朝は、日本版越王勾銭といったことになろうか。「命たにもたすかりなはいかてか本意をとけさるへき」と思っていたというのだから、助命の為には手段を選ばない頼朝の態度は、全く勾銭と変わりなく、子供ながら恐ろしいものである。

頼朝に関する二つ目の相当に長い言葉は、池禅尼のものである。

永暦元（一一六〇）年三月、伊豆国へ配流されることが決まって、頼朝は、禅尼の許へ暇乞いに参上した。禅尼は、危険人物と見做されないようによくよく身を慎むよう諭し、何の因果でこうも愛しいのかと、涙に暮れた。頼朝も涙を流して、実の母と思って、頼みにしていると答えた。禅尼は、更に言葉を継いで、父母への孝養の為仏事にいそしむように諭し、頼朝に似ていたという家盛のことを、問わず語りに話すのであった。

池禅尼の頼朝に対する言葉は、愛子家盛を偲ぶ母の心と、頼朝を愛しむ

者は景綱ということになるか。

先の義平の返事を聞いた景綱は、易やすと生け捕りにされた理由を問う。景綱は、読者に代わって、一番聞きたい処を尋ねて行く風だ。尋問の記事が終わると、同二十一日の経房の手による義平の処刑の場面となる。ここに、義平のもう一つの相当に長い言葉がある。

その中で義平は、白昼に処刑を計画した平氏を恨み、大魔縁となるか、雷となるかして清盛は勿論のこと、その与党まで蹴殺してやると述べる。そして、保元の合戦では為朝の策が、今回では熊野参詣途上の清盛以下を捕えるという自分の策が共に採用されずに終わったことを悔んで、切られている。

保元物語における悔みの言葉と殆ど変わらないが、義平の言葉は、経房の落電死という事件に対応している。この点で、恨みという面が強く出されているように思われる。一方、大魔縁は平家物語で清盛が「奢レル者」「猛キ者」となって、自分をはじめ、一門を亡ぼしてしまうことと深く関わっているのかもしれない。

次に、今昔物語集「平ノ維茂<sup>ガ</sup>郎等被<sup>タル</sup>殺<sup>サ</sup>語」の兼忠の言葉のように、親族の要求を拒否する例がある。発言者は少納言入道信西である。

後白河上皇は、右衛門督信頼が近衛大将の職を望んでいることを知って、信西に相談した。予て信頼の出世を不安に思っていた信西は、信頼を大将に任ずれば、益ます驕りを極めて、天下を乱してしまうだろうと述べて、上皇を諫めた。合わせて、信西は、阿古丸大維言宗通を白河上皇が任じた

いと思つたが堀河天皇が許さなかつた例、鳥羽上皇が中御門藤中納言家成を任じようとしたが公卿に諫められた例を挙げて、大将がいかに名譽ある官職であるかを説いたのであつた。信西に反対されたので、信頼の大将就任は挫折してしまつた。

上皇の相談は、要求に近いものだったのであらうと考える。その上皇と信西との関係だが、信西は上皇の乳母の夫ということである。従つて上皇は、信西にとって我が子のようなものであらう。天下の秩序を考慮して、信西は拒否したと描かれていて、氣骨をもつ点で兼忠に通じるのではなからうか。

信西のように氣骨のある貴族が平治物語では目に付くようだ。次は、要求に対してというのではなく、自ら年下の親族の行動・態度を諫める挙に出たものである。

公卿僉議に呼ばれた勸修寺左衛門督光頼は、信頼の上座に腰を据えたのであつたが、やがて座を立つと、見参の板を踏み鳴らして、弟の別当惟方を呼び出した。光頼は、僉議の議題があるとは見えなかつたと言い、自分が死刑に処せられると聞くが、刑を受ける面々は優れた人々なので、自分は寧ろ名譽と思つていと告げる。その上で光頼は、惟方が先日信頼の車に同乗して、信西の首実験の為に神楽岡に行ったことを厳しく咎めた。

この後、惟方の短い返事を挿んで、もう一つ光頼の相当に長い言葉がある。

惟方が天皇の意向だったので答えたのを咎めて、光頼は更に、天皇の

### 三

平治物語には、相当に長い言葉が八例ある。

それらの中で、保元物語に見られなかった内容は、義朝や義平の逃避行を語る相当に長い言葉である。地の文をなすことなく、或る人物の言葉として彼等の行動が伝えられるのであるが、それが迫真性をもって受け取られているようである。猶、そこには、今昔物語集の「駿河ノ前司橋ノ季通、構<sup>テ</sup>逃<sup>ゲ</sup>タル語」のような地の文との緊密な構成はない。

最初に、義朝の最後を語った金王丸の言葉について記そう。

平治二年正月五日、義朝の童金王丸が九条雑仕常盤の許へ、人目を忍びながらやつの様子で辿り着いた。そして、去る三日、義朝が尾張国野間で、重代の家人長田四郎忠宗に討たれたことを告げた。常盤を始めとして家内の者は、この知らせを聞いて、嘆き悲しんだ。常盤に尋ねられて、金王丸は義朝の最期を語った。

この金王丸のかなり長い言葉については、安部元雄氏に次のような指摘がある。<sup>(注七)</sup>

この部分は他本とまったく異った構成がなされている。流布本や金刀本ではこの部分が「義朝青墓に落ち著く事」「義朝野間下向の事付たり忠宗心替りの事」の二段にわかれて構成されている。ところが陽本の方は、「金王丸尾張より馳せ上る事」の中で、金王丸が尾張から京都の常葉のところに馳せつけ、義朝の最後を語るという構成になっ

ていて、その金王丸の話の中に、義朝青墓に落ち著く事や義朝下向の

事や忠宗心替りの事が語られてゆくことになっている。他本では、それが金王丸の語りではなく、作者の客観的な記述によってつづられている。したがって、金王丸はその記述の中の、一登場人物になり下つてしまふのである。

義朝側近の童の口から常盤達が捉えることの出来なかった義朝一行の動きが伝えられるという処が、迫真性を与えているのであろう。安部氏は、金王丸の言葉を平治物語の素材と見做されるが、「駿河ノ前司橋ノ季通、構<sup>テ</sup>逃<sup>ゲ</sup>タル語」の説話で言えば、金王丸はこの説話の語り手（季通の周辺）の位置にいる。

次に、悪源太義平の逃避行を語る言葉がある。

近江国石山寺の傍で病臥していることを聞き付けられて、難波次郎経房に生け捕りにされた義平は、伊東武者景綱の尋問を受ける。義平は、義朝の命を受けて、甲斐・信濃を固める為に行動を別にしたが、義朝の死によって折角の奔走も無駄になってしまった。その後、彼は単身都に上り、平家一門の暗殺を窺っていた。ところが、六波羅で怪しまれて、時期を待つ為に田舎に退いたところで、病気に罹ってしまったというのである。

右の義平の言葉は、前記の金王丸の語った義朝一行の逃避行を補うものである。義朝の死によって源氏の吸引力が失われてしまうと、暗殺者に変身するのであるが、それは英雄の残映である以上に、彼の執念の強さを物語るものになっている様だ。これは、当人の口から語られているので、「駿河ノ前司橋ノ季通、構<sup>テ</sup>逃<sup>ゲ</sup>タル語」の小舎人童の言葉に近いが、材料提供

の戦死を思い浮かべて、「前業ノ果ス所」と諦めようとするが、国史上誅殺された八人の大臣の中に「氏ノ長者」は一人もいないということが浮かんで来る。要するに、忠実の言葉は、最初に記したように愛子に先立たれた親の尽きることのない悔みそのものである。

忠実は前摂政・関白、頼長は左大臣、氏長者と、共に貴族の最高位を極めた者である。王朝貴族の権威の高かった時代には考えられもしなかった悲劇が訪れたのである。忠実の尽きない繰り言は、「ムサノ世」「亂世」<sup>(注四)</sup>の到来を象徴的に語るものだったに違いない。

以上四例は深く死に関わっている。保元物語の相当に長い言葉の特徴として、突然訪れた死との深い関わりということを挙げて宜からう。

次は、「新院為義ヲ召サル事」における為義の返事である。

崇徳上皇は、為義が参上しないので、左京大夫教長を遣して、説得させた。為義は、自分が合戦の経験に乏しいこと、相伝の鎧が四方に散るといふ夢を見たことを挙げて、上皇方の大將軍となることを辞退した。その代わり、八郎為朝を、「可然弓取ト生レツキタル事」、三年間で九州を支配し、合戦の経験にも富んでいることから推薦するのである。

この為義の返事については、栃木孝惟氏に、

為義が自己の武勇の閲歴を倭小化して語ったのは、一つには己のみた夢想によって院の御召しを断わるべく、ことばをかまえたにほかならないが、同時にそこで語られた為義の閲歴は、雄勁に語られる八郎為朝の閲歴と対照され、為朝ひきたての役割を果たしているわけでもあ

る。

という指摘がある。<sup>(注五)</sup> 為義の「為朝ひきたての役割」ということは、先の「為義最後ノ事」にも「哀、八郎冠者ガ千度制シツル物ヲ」という後悔が記されていて、一貫した為義の一面であると言つて宜い。又、為義の見た「夢想」については、別の箇所「自家の運命を予見する能力の賦与」<sup>(注六)</sup>と指摘されているが、「為義最後ノ事」の前記の義朝の孤立を危惧する言葉を見れば、その「予見」は「平治物語」にまで及んでいるのではないかという気がする。

最後に、これまで挙げて来たのは一人の言葉であるが、「將軍塚鳴動ノ事、彗星出ヅル事」には、数人の人物の語り合ったことを纏めて記したものがあ

る。鳥羽殿では故院の旧臣達が、崇徳上皇や頼長の言動に不安を募らせていた。しかし、彼等は結局、我が国が神国であることに期待を繋ぐことになった。白河・鳥羽二上皇の時代に「尊敬神祇、深帰仏法」ということが行われた、その神仏の加護、京の都が乱を知らない、神々に護られた地であることに期待した、というのである。

旧臣達の言葉は、本来は、崇徳上皇達の行動を制止する方法がなく、神仏に縋るだけであつたということだったに違いない。そう思つて見れば、先の部分は、全体の枠組みをこえて敬神思想が膨張したもののように見える。旧臣達の言葉となつてはいるが、そうすれば、保元物語編著者の言葉なのではないかと考えられる。

に参詣した母の心も、喜んで輿に乗った四人の兄弟も、全てが裏切られてしまっている。この母子の無念は晴れる時を知らない。乙若の言葉は「為義北方身ヲ投ゲ給フ事」に直結するのである。

ところで、「為義最後ノ事」にしても、「義朝幼少ノ弟悉ク失ハルル事」にしても、波多野次郎義通が直接関わっていた。義通については、「単なる資料提供者ではなく、武士についての創作を担当した作者の一人である」という仮説が安部元雄氏から提出されているが、この一連の為義の家族の最後譚も、義通から語られたものということになるのか。

乙若にはもう一つ、この少し前に相当に長い言葉がある。

四人の弟達をすかして、途中で泣かせないようにして船岡山に誘い出し、そこで処刑するようにと、義朝に命じられた義通は、為義が船岡山に連れて来るように命じた、とこしらえる。合戦が始まってから一度も父に会っていない兄弟は、我先に輿に乗り、道中も輿昇きを急がせる。船岡山に着くと、義通は、父為義、頼賢を始めとする五人の兄が既に処刑されたこと、兄弟四人ともこれからここで処刑するように命じられていることなど、本当のことを初めて告げる。四人の兄弟は、この話を聞くと、驚愕した。七歳の天王は、軍も出来ない自分まで殺せとは言わなかっただろうと問い、九歳の鶴若は、我等四人は郎等百人にも劣らない味方だと言わせる使者を立てよと言ひ、十一歳の亀若は只泣くだけであつた。これを聞いて、十三歳の乙若は、平氣を装って弟達を宥めた。父を切る程の兄が何で自分達を助けようか、使者を立てても時間を空費するだけだ、人には必ず来る死が

今来たと思うべきだ、父も兄もいない自分達は、生きて恥を曝すだけだ、と弟達に説いたのである。この乙若の言葉は、弟達に冷静に現状を認識させ、観念させるに充分なものであつた。三人の弟達は、皆泣き止んで、西に向かつて合唱したのである。

乙若のもう一つの相当に長い言葉は、右の弟達を宥めた言葉である。言い漏らしたが、その中で乙若は、義朝が一人になれば、二三年の間に源氏は滅ぶだろう、と予言している。十三歳と言ひながら、けなげな乙若の言動。この乙若のけなげさは、事情を明かしたとは言ふものの、だまして連れ出した義通の、乙若への鎮魂の語りなのかも知れない（義通の取った態度は、為義の場合と同じと言えよう）。

猶、この三様ながら死を恐れる三人の弟を説得して、正反対に死に就かせる乙若の言葉は、どこか、今昔物語集「平維茂、討テタル藤原諸任ヲ語」の維茂の言葉に通じている気はしないであろうか。恥を重んじて死を軽くし、そのような意識を表明することによって皆を翻意させて行くのは、武士説話以来の伝統かと思われる。

以上の三例は、処刑される直前の本人の言葉であるが、愛子の死を知らされた父親の繰り言もある（「左府御最後、大相國御歎キノ事」）。

経憲入道から悪左府頼長が息を引き取ったことを知らされた富家殿忠実は、頼長に会わなかったことを悔む。公卿・殿上人は勿論のこと、武士でも主だった者には戦死者は出ていないのに、どうして頼長にだけ矢が当たってしまったのか、忠実の残念さは様々に広がる。一度は漢の高祖の淮南で

## 二

保元物語の文保本・半井本の本文で二百五十字以上ある、相当に長い言葉（今昔物語集の場合とは、本文の字数だけを対象にしているので、やや基準が異なる。平治物語以下も同じ。）は、筆者の調査で六例ある。その六例の中で、保元物語の特徴をなしていると思われることは、処刑される直前の言葉が半数程あることである。

最初に、「為義最後ノ事」における為義の言葉から見て行きたい。

父為義の首を刎ねよという命を受けた義朝は、乳母子の鎌田次郎正清に相談する。正清は、父とはいいいながら、朝敵となってしまったのだから、殺しても問題はないと述べ、寧ろ人手に懸けず、自らの手で討つて、死後の孝養を尽くした方がよいと勧めた。義朝は、仕方なく、正清に処刑をさせた。正清は、義朝が東国に帰って兵を挙げると偽って、為義を輿車に乗せ、七条朱雀で、輿に乗り替える処を不意討ちにしようと計画した。ところが、その段になって、波多野次郎義通が不意討ちというのは余りに酷いと言いつ出した。個人的な恨みがあつてということでもないのだから、事情を告げて、最期の念仏を唱えて貰ってから殺すのが道ではないか、と言うのである。正清も理に折れて、義通に処置を任せた。義通は、事情を為義に告げた。

為義の相当に長い言葉というのは、その場で処刑されることを突如知らされた為義の次の言葉である。

最初為義の言葉は義朝が自分を助けて呉れなかった悔しさに充ち満ちて

いる。それは、それまで為義が全く疑わなかった「親子の情愛が裏切られたこと」<sup>(注)</sup>への悔しさであろう。信頼し切っていたことを悔む思い、それに「五逆罪ノ其ノ一」を犯してしまふ義朝が陥る境遇が目に見える悔しさ。

為義は為朝があれ程止めたことを振り切つて、義朝を頼ってしまったことに切齒する。しかし、自分が為朝の言葉を振り切つて来たことを思い出すと、為義には覚悟が定まったように見える。為義は言う、「我子ノ手ニ懸テ 相伝ノヲノレラニ被切事コソウレシケレ」と。

この最後の為義の言葉は、ともかく「我子ノ手」「相伝ノヲノレラ」に到り着いた点で、義通の配慮、正清の配慮を酌み得たと言えるのではない。激しい悔しさから、その思いを翻して潔く身を任せる心境へ、為義の相当に長い言葉は、為義の魂のある救済を描いて見せるのである。

次に、「義朝幼少ノ弟悉ク失ハルル事」における乙若の言葉を見てみよう。

三人の弟達から先に処刑させた乙若は、義通に向かって母への伝言を頼む。それについて、乙若は母が自分達四人の子供を連れて行かなかったのは、下人がいなくなつて「上カチニテ下少ニテ有ハ見苦シキ」ことだからだったと説明する。母は恥を重んずる人だったのである。帰宅した母は、四人が死んだと聞いて遺言はなかったかと聞くに違いない、が、皆、父為義が呼ぶと聞いて喜んで輿に乗っただけだと言つて、四人の鬢髪に名前を書いて、母に渡すよう義通に頂ける。

乙若の言葉は、聞く者の胸を締めつけさせる。恥を重んじて一人で八幡



も諸任と戦つて来る、と宣言した言葉である。従つて、この説話のかなりに長い言葉も、前の「平ノ維茂<sup>ヲ</sup>郎等被<sup>タル</sup>殺<sup>サ</sup>語」の場合と同じく、説話全体の核心、維茂が「止事无<sup>キ</sup>兵」であつたことを伝える不可欠の部分なしているのである。

又、右二つの説話中のかなりに長い言葉は、兼忠は子供の維茂の、維茂は自分の郎等のと、共に上位者が下位者の要求や意見を拒否しているという共通点が認められる。そして、これらの説話ではその拒否という形で明らかになる落差が、主人公の「止事无<sup>キ</sup>兵」振りを浮き上がらせ、印象付ける作用をなしていると考えられる。

さて、これまでに示した二つのかなりに長い言葉は、共にその説話の不可欠の部分なしていたが、三つ目においても、このことは変わらない。三つ目に挙げるのは、巻第二十三の第十六「駿河ノ前司橋ノ季通、構<sup>テ</sup>逃<sup>ゲ</sup>タル語」に出て来る小舎人童の、季通救出の経緯を説明した言葉である。これは、武士の言葉でなく、小舎人童の言葉である点で、前二例と異なる面を有つ。

通つていた女房の家の者に不愉快がられた季通は、女房の局から出られないように取り囲まれてしまう。逃げ出す手段がないことを知つた季通は、夜が明けてからどうともなろうと覚悟を決めた。が、翌朝彼を迎えに来る小舎人童が、何も知らずに入ろうとして、家の者に捕まりはしないかと、心配した。翌朝、季通が心配していると、どうして入れたのか、小舎人童が入つて来る。「御読経の僧の童子だ。」と名乗るので、感心したが、局に

来ていつもの女を呼ぶのではないかと、と復心配した。ところが、小舎人童は局にも来ずそのまま通りすぎたので、季通は、彼が事情を知つていないとに気付いた。事情を知つたら何か策を構えるに違いないと、季通は注意を四方に払つた。果たして、大路で、「引き剥ぎだ。殺される。」という女の声が揚がつた。それを聞くと、所々を固めていた家の者は、「捕まえる。」「どちらに逃げたか。」と騒動して、大路に飛び出した。季通は、小舎人童の仕業に違いないと考えたので、この紛れに、だれもいなくなった門の錠を引いて、家から逃げ出した。騒動はやはり小舎人童の仕業で、彼は季通にこの朝の彼の執つた言動を話して、明かすのであつた。

この説話のかなりに長い言葉は、この最後の小舎人童の説明である。それは、季通を中心とした、これ以前の叙述部では、陰になつていて描かれない面であつた。従つて、小舎人童の言葉によつて、この朝の登場人物の行動の全体を、読者は初めて捉えることが出来るのだが、この言葉の重要性はこのことだけに止つていない。実は、小舎人童の言葉によつて読者は彼が、季通が思つた通りの「ウルセキ奴」であることを知ることが出来るのである。従つて、この小舎人童の言葉も、この説話の不可欠の部分に外ならない。

以上のように、今昔物語集の武士説話に出て来るかなりに長い言葉は、それぞれの説話の焦点をなしている。この説話の焦点を示す方法として、かなりに長い言葉を配しているということは、注目して置くべきだろう。

した太郎介がいた。小侍男はその当時幼くて、下手人を知らなかったのだが、伴に太郎介がいるのを見た兼忠が、その旨を示したのであった。教えられた夜、小侍男は父の敵太郎介を討った。翌朝、太郎介が殺されているのが発見されて、維茂の陣中は大騒動になった。維茂は小侍男の仕業に違いないと考えて、兼忠に尋問の許可を問うた。ところが、それは逆に兼忠から彼の敵討ちに処する態度を詰問されることになった。維茂は小侍男を尋問するのは無益と思って、そのまま帰国した。

本話のかなりに長い言葉は、右の維茂への厳しい返事である。勿論、兼忠も小侍男が殺したに違いないと思っている。従って、「詰問」というのは、下手人が判つてからの処置をめぐつての意見なのである。父祖の敵を討つのは「天道」に許されている筈だ、「止事无キ兵」であれば、父祖の敵をそのままにはしない、とすれば、「天道」の許した者を兼忠の許から呼び出して殺すというのは、父兼忠を大したことのない武士と見下していることになりはしないか、というのが兼忠の指摘である。本話は、「止事无キ兵」とはどのような者であるかを、兼忠の言葉によって示したものとすることが出来よう。従って、本話の核心は、このかなりに長い兼忠の言葉そのものである。

二番目に、「平ノ維茂<sup>ガ</sup>郎等被<sup>タル</sup>殺<sup>サ</sup>語」の次の説話「平ノ維茂、罰<sup>チタル</sup>藤原ノ諸任<sup>ヲ</sup>語」に出て来る維茂の言葉について考察してみよう。

敵対出来ないで逃げ去ったと見せて、維茂を油断させ、不意を突いて来た諸任に、維茂は多勢に無勢、死を覚悟せざるを得なかった。それでも、

彼は、逃げたという評判を残したくないと思って、家人を手配りして、諸任軍を迎え討った。しかし、戦う手段も尽き、勝負が決定的となった時、維茂は、女人に変装して湖に身を投じ、難を逃れた。勝った諸任は、維茂を討つたものと判断して、小舅の大君の館に向かい、休息しようとした。大君は、維茂を討つたことを賞めていたが、その首を持っていないことを知ると、すぐ館を立つように言った。諸任は、大君の慎重さを嘲いながら、しかし、館を出て、五六百町行つた所で祝宴を張った。一方、維茂館跡には郎等達が三三五五に集まつて来たが、騎馬武者が五六十人になった頃を見計らつて、維茂は湖から姿を現した。郎等達は大喜びして、維茂の身の回りのものを取り寄せた。維茂は彼等に、最初から逃げようと思えば逃げられたのだが、逃げたという語を残すまいとしてこんな目にあつた、と弁明した。そして、この復讐をどうやるか聞いた。郎等は、軍勢が足りないで、後日軍勢を集めてから戦うように進言した。これを聞いた維茂は、自分はこのままでは一日でも顔を見せることが恥ずかしい、家の内にいたら焼け死んでいた身だから、命は惜しくない、と言って、一人でも諸任の館へ押しかけて、戦つて来る、と宣言した。維茂の言葉を聞いた郎等は、前言を取り消して、彼に同調した。間もなく、維茂達は、勝利に酔いつぶれた諸任軍を襲つて、諸任の首を取った。

右の部分で、説話の要をなしているのは、維茂の恥を重んずる言動と、大君の維茂という人物をよく知った身の処し方であろう。この説話中のかなりに長い言葉は、右の維茂が生きていることを恥じ、このまま一人で

# 中世四軍記の相当に長い言葉

―各古態語り本について―

橋 口 晋 作

院政期から執権政治確立期にかけて発生した合戦を主な材料としている四つの軍記、保元物語・平治物語・平家物語・承久記を読んで行くと、相当に長い言葉が出て来る。この相当に長い、登場人物の言葉は、別に軍記物に至って初めて現れて来た訳ではない。「源氏物語」をはじめとする作物語にも、既に、これに勝るとも劣らない量の相当に長い言葉がある。しかし、前記の四つの軍記を通して読んでみると、その相当に長い言葉の内容などに、各作品ごとに違いがあるように感じられてならない。しかも、その違いが作品全体の読後感の違いとかなりに関わっているような気がするのである。そこで、本稿では、この各軍記の相当に長い言葉を取り上げて、その内容などの特徴を考察してみることにはしたい。

相当に長いという表現を用いたが、特に何らかの基準をもっている訳ではない。只例文がそれ程多くならないという、全く便宜的な理由から、本稿では取り敢えず文字で二百五十字以上ある（漢字・仮名を区別しない）ことを基準としてみた。一方、なるだけ共通の面で比較したいと思うので、所謂語り本を材料とすることにした。又、各軍記の独自の特色を

掴みたいと思うので、現在最も古態を残すと考えられている伝本につくことにした。具体的に言えば、保元物語が文保本・半井本、平治物語が陽明文庫本・学習院大学本・島原松平文庫本、平家物語では屋代本・竹柏園本、<sup>(注)</sup>承久記が慈光寺本である。

一

保元物語以下の所謂中世軍記に入る前に今昔物語集の武士説話を一見して置きたい。平安後期の武士の生態を伝えていると言われる巻二十三、二十五の説話を読んでもみると、意外にかなり長い言葉がある。但し、今昔物語集は漢字と片仮名による宣命体の文章で、先の基準をそのまま使うのは相応しくないように思える。そこで、漢字に付いている読み仮名と片仮名表記の文字とを合わせて二百五十字（ほぼ二百五十音ということになる）以上ある言葉を、今昔物語集のかなり長い言葉としてみた。そうすると、先の巻の武士説話十二話のうち、三話にかなり長い言葉を見つけ出すことが出来る。次に、そのかなり長い言葉について、多少の考察をしてみたい。

まず最初に、巻第二十五の第四「平ノ維茂<sup>ガ</sup>郎等被<sup>テ</sup>殺<sup>サ</sup>語」のかなり長い言葉、上総守兼忠の言葉を見てみたい。関係する部分の粗筋を次に記す。

父兼忠の上総守着任を祝う為、子余五將軍維茂<sup>ガ</sup>郎等達を連れて、陸奥国から参上した。その中に、先年兼忠の小侍男の父を、馬咎めをして射殺